

岡山、広島、山口の天理教

中国地方の岡山、広島、山口3県の天理教を書いてみよう。3県の教会数はいずれも370カ所余り（『みちのとも』立教175年12月号には岡山378、広島377、山口370）でほぼ同じ。しかしこれは単なる偶然で意味はない。

教会数は同程度だが、その内実はかなり違うということを書いてみよう。3県の人口と人口10万人あたり教会数は次の通りである。

岡山—人口194万人、10万人あたり教会数19.47カ所
 広島—人口286万人、10万人あたり教会数13.2カ所
 山口—人口144万人、10万人あたり教会数25.66カ所
 （人口は2011年10月総務省統計局）

人口あたりの教会数がこんなに違う。山口は広島の2倍近く多い。しかもおぢばからの距離を考えると山口県の天理教はかなり多いと言える。そして広島にさほど多くないのはなぜか。いろんな問題が浮かび上がる。岡山は両県の中ほどである。

おそらく広島は仏教の盛んな土地柄で、特に安芸門徒と呼ばれる浄土真宗が強く本教伝道には壁であったと考えられる。

明治29年末の3県の教会数は岡山と山口が共にほぼ40カ所であるのに対し、広島は20カ所余りと半分程度である。伝道初期からすでに差がでていた。

広島が仏教の盛んな所であるのに比べ山口、岡山は新しい宗教にやや寛容だったのではないか。安易に書けないが岡山と山口は天理教を受け入れる素地が、少なくとも広島よりあったのではなかろうか。

では3県にどこから天理教が入ってきたのだろう。岡山へは大阪、兵庫、奈良の各府県から伝わってきた。広島へは岡山と大阪からが多い。岡山に始まった笠岡の信仰が隣接する広島に伝わった。山口へは徳島県からの伝道が目立って多く、全山口の半分近くになる。高知などからもあり、四国からの伝道によって今の山口県の半分以上が作られた。大阪、兵庫など近畿からも多いが広島からの伝道はほとんどない。

ところで前回の「鳥取、島根の天理教」では豊岡、山陰の両大教会を中心に述べた。両大教会の2県全体に占める割合が約47%に上るからである。対して今回の3県には豊岡、山陰の教会は11カ所しかなく、全体の1%にも満たない。郡山—山陰系山陽大教会を加えても42カ所、3.7%である。このこと一つをとっても同じ中国地方でありながら伝道においては全く違うことが分かる。

具体的に述べたい。岡山に最初に天理教が入ったのは明治18年だった。大阪の豊商だった上原佐助夫婦とその両親佐吉夫婦は明治13年頃から熱心な信仰者になっていた。商売がやや下向きになったこともあって佐助は東京へ出て布教と商売をやり直そうとする（本連載10参照）。この明治18年、佐吉夫婦は郷里の岡山県笠岡に帰り、佐助の妻さとも佐吉夫婦の懇望により両親世話のため翌年笠岡へ帰る。以後佐吉夫婦とさとによって岡山に天理教信仰が伝えられる。

さとが笠岡の知人をおたすけしたことが評判となり、尋ねて来る人が増えた。片手間に始めた小間物店に、座る間もないくらいたすけを求めて来る人が多かった。さともそれに応え近在の村々へおたすけに歩いたという。

明治24年、岡山で最初に笠岡支教会（現大教会）が誕生し、明治29年末までに玉島、高屋など岡山県内に5カ所の教会が

できていた（広島県にも5カ所設立）。

兵庫県播州の北系統布教師（青野原か）神沢滝蔵が西へ西へとおたすけ先を伸ばし、三石町を経て岡山市に腰を落ち着けおたすけを開始した。明治22年のことである。

神沢の布教により明治25年、岡山県2番目の教会として岡山支教会（現大教会）が設立された。当初、総社、津山など郡部に教線が伸び次々に教会ができた。その結果、明治29年末には22カ所の教会が県内に設置されることになる。この時点で県の半数以上が岡山系統の教会で占められていた。

岡山大教会には現在大教会を含め63教会があるが、その内60カ所が岡山県内と、ほとんどが近距離にある。

岡山県内教会を大教会ごとで多い順に並べると岡山、玉島、明和、笠岡、網干となる。笠岡および岡山大教会は既に述べたのでその他を簡単に触れる。

玉島は笠岡近郊の村に住んでいた岡崎軍治が備中眞明組（後の笠岡支教会）により入信。玉島町（現倉敷市）を中心に布教した結果できた教会である。杜氏職であった岡崎は県の南西方面や高梁、新見、津山などへ、また島根県本庄へも道を伝えた。玉島大教会全51カ所の教会の内、岡山県に43カ所がある。

奈良県明和大教会の部内教会が岡山県内に36カ所もある。香川県坂出の有馬弥平が持病の治癒を願っておやしきに参詣した。そこで後の明和布教所（現大教会）村田五良平に会い教理を聞いたことが始まりで、明治29年綾出張所（後小豆島に移転し聖踏分教会となる）が設立された。この聖踏分教会から岡山へ伝道線が伸び、岡山の明和系教会の大半になった。

網干大教会関係の教会も28カ所と多い。兵庫県姫路で盛んだった網干眞明組（現網干大教会）の布教師が明治23年、岡山市へおたすけに出たことから後の東備分教会となる。東備は現在27カ所の教会を有し、その内26カ所が岡山県にある。

広島県で最も多くの教会を有するのは笠岡大教会で78カ所ある。岡山県の笠岡系31カ所に比べ2倍以上もある。笠岡は岡山県の西端で広島県に近い。笠岡周辺に広がった信仰は当然のごとく広島県に伝わり明治25年福山、神邊の2教会が設置された。福山分教会は現在21カ所の教会があるがその全てが広島県。また神邊分教会の伝道により設立された教会や岡山県の高屋分教会の部内教会も広島県に多い。両県の県境付近は旧国名で備後と備中であり、笠岡大教会の信仰が備中の西端に始まり隣接する備後に伝わったのである（なお、玉島、高屋、福山、神邊は同時に設立）。

続いて多いのは北系統44カ所、中河系統の30カ所である。北系統は現在の尾道分教会、北大教会、芸備分教会などで伝道線はやや複雑である。中河系統は30カ所の内13カ所が因島、生口島、佐木島などの島々にあり、その他も海を挟んだ向かい側にある。関連して言うと、尾道—今治（愛媛県）間の島々（因島、生口島、佐木島と愛媛県の大三島、伯方島など）は人口の割に教会がとても多い。後で述べる山口県周防大島の場合も同様。いつか本連載中に触れたいと考えている。

山口県の伝道は特徴的である。その第一は徳島県の撫養—名東の伝道線だ。現在、山口県で教会が多いのは周東大教会81カ所と防府大教会78カ所。合計159カ所。合わせると山口県（11頁へ続く）

「教学と現代9」(海外伝道特別講座) 報告: 第1回

金子 昭

標記の講座が1月29日、天理大学研究棟第1会議室にて開催され、天理大学及び天理教海外関係者など約70人が参加した。この講座は、本研究所が天理教教祖130年祭(2016年)までの今後3年間の企画「海外伝道の現状と課題シリーズ」の第1回として開かれたものである。

このシリーズ講座のねらいは、海外で本教の布教拠点のある国や地域の拠点長に、現地リアルタイムに起こっている社会状況や布教伝道の姿を語ってもらい、あわせて本研究所にどのような後方支援を期待しているか、その要望を聴くというものである。

今回は、「アメリカ・ハワイ・ブラジル伝道庁長に聴く」というテーマの下、これら3つの国や地域の伝道庁長にそれぞれ現地の布教伝道の現状と課題について報告していただき、その後3人の庁長を交えて総合討議を行った。

これらの国に共通するのは、天理教の教えが最初期には主として日系移民を対象に広まったことで、世代を重ねるに当たって現地の人々にも布教伝道が行われるようになってきたということである。

深谷忠一所長による開会挨拶に続いて、担当の金子昭が趣旨説明を行った後、第1講として、深谷洋アメリカ伝道庁長より「アメリカの布教伝道の現状と課題」について発題。ロサンゼルスにおいてアメリカ伝道庁が設立されたのは、1934年(昭和9年)であり、来年(2014年)には伝道庁創立80周年を迎える。

深谷洋氏は2010年に11代目の庁長として就任。現在、アメリカ伝道庁管内の教会数はカナダも含めて62カ所、布教所数は69カ所ある。深谷庁長は、広大な管内の教会やようぼく信者の丹精について、その課題の大きさと庁長としての重責を強調。アメリカでは伝道庁のある西海岸と、ニューヨークセンターのある東海岸とで、それぞれ「Three Day Course」を実施するなどの状況を説明した。また教内の次世代の育成に力を入れると同時に、アメリカ人・カナダ人社会への布教伝道をどのように進めて行くかが課題であると述べ、同性婚や臓器移植などの社会問題について天理教としての研究と発信について、研究所への期待を表明した。

第2講は、浜田道仁ハワイ伝道庁長による「ハワイの布教伝道の現状と課題」。ハワイ伝道庁が設置されたのは戦後の1954年(昭和29年)である。来年(2014年)には伝道庁創立60周年を迎える。

浜田氏は2001年に7代目庁長として就任。現在、ハワイ伝道庁管内の教会数は34カ所、布教所数は39カ所ある。社会状況はアメリカ本土とオーバーラップしているところもあるが、固有の問題もあるという。ハワイは観光産業で成り立っている島であるが、それだけに国際紛争などがあるとその打撃は大きく、暮らしも外から見るほど楽ではない。かつては日系移民の割合が大きかったが、近年フィリピンの移民も増えてきて、移民社会の状況は様変わりしつつある。天理教の教会も戦前からある教会が3分の2を占め、すでに教会本部に名称をお返ししたところもあり、浜田庁長としては、世代交代が大きな課題であり、基本的に個人主義的な社会風土の中で、信仰をどう次々に伝えて行くかが重要であると認識していると述べた。

またそれと同時に、キリスト教社会にどう楔を打ち込んでいくか、「にをいがけ」(布教伝道)の方法について模索中であると述べた。

第3講として、村田雄治ブラジル伝道庁長が「ブラジルの布教伝道の現状と課題」について発題。ブラジル伝道の歴史は日本人移民の歴史と共に古いが、伝道庁が設立されたのは第二次世界大戦後6年目の1951年(昭和26年)である。2011年6月12日、真柱夫妻を迎え、創立60周年記念祭を執り行った。

村田氏は1993年に2代目の庁長として就任。現在、ブラジル伝道庁管内の教会数は89カ所、布教所数は315カ所ある。ブラジルの宗教は、かつてはカトリックが9割以上を占めていたが、現在は6割程度になっている。本教の布教伝道の進め方は、日本国内と同じように、パンフレット配布や戸別訪問が中心である。

伝道庁としての教化育成活動は着実な歩みを進めている。教会本部修養科と同じ資格が与えられるブラジル修養会は、1962年に伝道庁で第1回を開催して以来、昨年(2012年)までに105回開催し、受講者総数も6,155名になる。最近では信仰初代も増えており、ようぼく信者の8割は日本語が分からない。そのため、村田庁長は、歌って踊れるポルトガル語の「みかぐらうた」の可能性の検討なども視野に入れて、より現地化を目指しての動きを進めていると述べた。

最後に、佐藤浩司主任の司会による総合討議が行われた。これら3つの国や地域で、世代交代により日本語が通じない人々が増えてきたが、その際の教化育成や布教伝道のあり方、また文化事業等の可能性などについて、活発な質疑応答が交わされた。深谷所長は、閉会挨拶の中で、この講座が今後の教学協働を進める上できわめて意義のある出発点となったと述べた。

本誌では、来月号より各庁長の講演の要約を順次掲載していく予定である。

(3頁からの続き)

全体の43%にのぼるが、いずれも徳島県の撫養系伝道者によって始められた。撫養大教会初代会長土佐卯之助は山口県佐波郡(現防府市)出身で、撫養系統の人たちは師匠の郷里に天理教を伝えようとしたのだという。

明治25年と26年、撫養の役員岩朝脇次郎は九州布教の途次、山口県佐波郡右田村で視察を兼ねた布教を行った。明治27年には本格的布教のため青年布教師古川太十郎が派遣された。古川が短期間に成果を挙げたので土佐卯之助は名東の柏原友吉と相談の上、古川に加えて5人の青年を山口布教に送る。この結果、古川ら4人は佐波村(現防府市)に明治28年防府支教会を、三浦文平、管川峯次郎は高森村(現岩国市)に同じ年、周東支教会を設置した。現在、防府市周辺は防府大教会系統が多く、岩国市、周南市周辺は軒並み周東大教会の教会である。

防府と周東より2年も早い明治26年、県北の萩に萩出張所(現北長門分教会)が奈良大教会の布教師により設置された。これが山口では最初の教会である。

その他、山口県については書くべきことがたくさんある。下関など県南部は教会が多く、周防大島(屋代島)は人口の少ない島に15カ所もの教会がある。いつか書いてみたい。

(前号の記述を訂正する。「木岡義八郎」は「木岡儀八郎」、また鳥取分教会の設立は明治28年ではなく明治26年。)